

不確かな世界において、想像力で未来を開く

尺戸智佳子

山下麻衣+小林直人(以下、山下+小林)は、自らの行為を媒介とした映像インスタレーションを中心として制作活動を行ってきた。状況そのものを作り出し、そのイメージを提示することで意味や価値観を問う。並びに、ある風景や場面に行為を挿入することでもの見方や考え方を揺さぶり、潜在する事物を顕在化させる。また、そこには幾つかの根本的な姿勢が含まれている。想像力とその可能性を提示すること、自然や世界との関係を再構築すること、既存のシステムや価値観に疑いをもち、豊かなそのアイデアを持って代替案を提示してみせることではないだろうか。そこから導かれた作品は、真摯な態度と滑稽さが表裏一体となっていて、かつ有益か無益か等の両義的な状況下で鑑賞者の思考を両極端に揺さぶり、発想、視野の拡大を促す。それらは、私たちの暮らしのあり様に関わる社会のシステムや世界との関係について、重要な気づきを与えてくれるのだ。

出品作品ではないけれど、本展に示唆を与えてくれる作品として《Major League Birdwatching》(2011)[fig.1]に触れてみたい。ニューヨークのヤンキースタジアムでバードウォッチングを試みた作品である。鳥を観察する作家の行為を通すことで、盛り上がる試合状況、客席やグラウンド等の境界には全く関与せず、自由に往来し餌を探す鳥たちの様子が見えてくる。人の世界と鳥の世界、同じ空間を共有しながらも、それぞれの重ならない意識が作品の中に立ち現れている。



[fig.1] Major League Birdwatching, 2011年、シングルチャンネルビデオを野球帽に映写、ステレオサウンド、三脚 サイズ可変、9分30秒 Cプリント 40 x 30 cm

生物各々の知覚世界と作用世界によって結合された様々な世界、それらをヤーコブ・フォン・ユクスキュルは『生物から

見た世界』の中で「環世界*1」と呼んだ。世界は一つのようにありながら、その中で様々な生命体が、各々の知覚によって世界を構成しているというのが、私たちは、日常的にそれを意識する機会や、他の生物の世界観を想像する機会は少ないように思われる。

作家によれば、《Major League Birdwatching》は、人と鳥の二つの世界を繋げようとした、あるいはせめて見つめることを試みたものという*2。中尾英恵は、本作を含む幾つかの動物が登場する作品に触れて、作家の世界観は「同じ物も、見る者によって異なるという一水四見という道元禅師の教えと繋がっている*3」と指摘した。他作品においても、作家は人以外の自然環境と様々なあり方で接点を持ち関係を考察してきた。そこには、二元論に疑いをもち、人間中心主義的な視点から外れた地平で世界を見つめる姿勢が常に伴っている。

本展においては、これまでの作品と地続きでありながら、人と自然のゆるぐ境界について、作家を含め鑑賞者各々が考える契機となるような作品が提示された。

不確かな世界で

「蜃気楼か。」この展覧会タイトルは、芥川龍之介の最晩年の短編小説『蜃気楼―或は、続海のほとり―』（『婦人公論』昭和2年3月）において、鶴沼海岸の蜃気楼見物の帰りに主人公の友人がふと呟いた言葉が引用されている。この小説は、自身の近辺に取材をした私小説の形式で書かれたもので、志賀直哉の私小説『焚火』（『改造』大正9年4月）を芥川が称揚した言葉である「「話」らしい話のない小説」等の世界観を自身の作品に反映させたことが知られている。身近な日常の出来事が描かれる中に、蜃気楼、マッチの火、混血児等、意味深な出来事が挿入されるが、最終的に主眼の当てどころが分からないような、不可思議な印象が残る。作家も文中の「蜃気楼か*4。」という言葉が、「不確かさ」を絶妙に表現しており、展覧会の雰囲気と同じ印象をもたらしていると感じたというように*5、この小説のやや朦朧とした世界観は、本展全体を包んでいる。とりわけ、堤防に設置されたm型看板と、海の揺らぐ風景、そこに起こる蜃気楼を、ライブ映像で延々と見せる《infinity ~ mirage》(2021年)の縹渺とした作品世界と、どこか通じるようであった。

本書に寄稿していただいた魚津埋没林博物館の佐藤真樹学芸員の文章で明らかのように、蜃気楼は自然現象である。しかしながら作家も言うように、自然現象というものはそもそも曖昧で掴み所がない。制作過程では、カメラを設置する魚津市の海岸沿いから、看板を設置する8キロメートル先の生地海岸の風景が、地球の丸みで本来は見えないはずの「見かけの風景」であることを知り、変化する大気と対岸の像が不安定に揺らぐ中で、コントロールできないことを実感し翻弄される日々を過ごしてきた。もっとも、本作において作家は「不確かさ」について強く考えていた。『蜃気楼―或は、続海のほとり―』のなかで主人公は「何だか意識の閾の外にもいろんなものがあるような気がして、…………*6」と呟いていた。ユクスキュルもまた、先の書籍の「結び」において、自然が客体として果たしている役割は矛盾に満ちており混沌としていると指摘した上で、「この多様な環世界はすべて、あらゆる環世界に対して永遠に閉ざされたままのある一つのものによって生まれ、支えられている。そのあるものによって生み出されたその世界すべての背後に、永遠に認識されえないままに隠されているのは、自然という主体なのである*7」と述べていた。

《infinity ~ mirage》が示す不確かさは、自然あるいは世界の本质であって、私たちはそもそも、そういう中で生きているのだということに気づかせてくれる。時には蜃気楼や陽炎によって日常が揺らぎ非日常的な気配が上書きされながら、日々移り変わる千差万別で無限の現象がイメージとして引き出されてくる。また、ライブカメラという装置が「今」の現象であることを実証し、その不可思議さを裏付けてくれる。その上で、流動する現象の中で生まれては消えていく生命やその他のあらゆる物質の、絶え間ない結合と分離、「もの」と「こと」の反復、そのようなマイクロとマクロの双方の世界へと思考が広げられていくのだ。

作家が作品の中に書き記したパスカルの言葉、「無限の中において、人間とは一体なんなのであろう*8。」という広大な問いかけは、鑑賞者それぞれの想像力へと開かれているのである。

人（ ）自然への思索

数えるには不確かな海の波を1000まで数え続けた《1000WAVES》(2007年)、ミネラルウォーターをドイツの源流まで戻しにいった《Release of mineral water》(2004年)、海

岸の砂浜で砂鉄を集めて一本のスプーンを作った《A Spoon Made From The Land (大地から作った1本のスプーン)》(2009年)、海の音を録音して奥深い山でそれを再生した《海の声を山に聞かせる》(2017年)、愛犬のアンと彫刻作品を作った《Anne and Anne's Sculpture》(2012年)等。

山下+小林の自然への考察には、観察すること、動植物等の自然に自らが働きかけること、その自然と協働すること、という凡そ3つの態度が窺える。それぞれが横断して作品に表れていることも多いし、それら全てが一様の思考性を持つわけではない。作家は、以前《考える葦／考えない葦》(2021年)の考案時に読んでいたという、梅原猛の『人類哲学序説』で述べられている「草木国土悉皆成仏*9」という日本的な思想に、西洋の近代的なそれよりも共感できたことを教えてくれた*10。循環を根本としたそのような自然観は、様々な「もの」が画像で映し出され、そこに様々な「me」という音があてられ切り替わっていく《I Am Everything, Everything Is Me》(2015年)にもよく表れていた。

さて、展示室に入室してすぐの大画面には、朝日町の間で制作された《人（ ）自然》(2021年)が映し出されている。この自転車のシリーズは2019年に2作が発表されており、いずれも背景を流れていく風景や、走行し続ける行為の意味が、光の残像効果でタイヤ部分に現れる言葉とともに、イメージに集約されて一つの作品となっている。《人（ ）自然》は、カッコ部分に入る8種類の助詞*11が入れ替わることで、意味が大きく変化するところに率直な作家の問いが表れる。かつ、その問いは本展全体にも係る重要なものとなっている。背景の風景は、境川の上流方面から、人と自然の関係が逆転しつつある自然豊かな小さな村を經由して、さらに下って行く。作家の行為が風景に挿入されることで引き出される情報から、この地域の歴史の痕跡や、現在進行形の人と自然の関係が見えてくる。それらが示すものが複雑に絡み合い、多角的な思考が促されるのである。

一方、とても原始的な関係が見出せるのは、《人（ ）自然》の裏側に展示された、《infinity》(2006年)であろう。「人が歩けば道ができる」ことを、ある夏の5日間にわたり芝生を走り続けて実証した作品だ。時間と労力によって生み出された美しい「∞」の道も、冬には芝生が繁殖し消えていたそうだ。背面の《人（ ）自然》で映し出される自然観と影響し合いながらも、他方で向かい合うように展示された《infinity ~ mirage》とも繋

がり合う。働きかける人の行為によって、自然との関係も、起こる現象の意味や効果も変化する。

《How to make a mountain sculpture – Japanese Mountains 劔岳》(2013年)では自然へのまなざしが提示される。2006年からスイス等で制作されてきたシリーズであったが、大地をも大きく形を変え得るという東日本大震災の出来事に衝撃を受けたことで、自然を観察し記録するという古くからの手法を用いることに更に大きな意味が与えられた作品だ。大自然の中で直向きに彫刻する作家の行為は、真摯であるほどに滑稽に見え、そのような人と自然のスケールの対比から、根本的な世界の構造へと思考が導かれている。

傍の光が差し込む小部屋に展示された、《考える葦／考えない葦》は、鑑賞者の考える行為そのものへも問いかける。窓の外に見える葦の風景を背景に、モニタの中では2本の葦が揺れている。虫の声や川や近くを走る車等の音が、混じり合って心地よく聞こえている。本作品タイトルも『パンセ』における、人間は考える葦である^{*12}という思想が参照されている。パスカルは、人間は葦のように心許ない存在でありながらも考えることに尊厳がある、しかしその考えは愚かなものでもあると指摘する^{*13}。歴史を振り返ってみても、繰り返し参照されるような偉大な考えがある一方で、懸命に考えた結果でも大きな反省を伴うこともある。ここでは、人と自然を考えることについて、メタ的な観点が導入されている。

ところで、本作は葦を人に置き換えて鑑賞するが、必ずしもそれだけに断言されてはいない。例えば、植物が「考える」とはどういう事なのか。人類学者のエドゥアルド・コーンは、『森は考える』において、記号学的な観点から、思考を人間のみならずあらゆる生命へと拡張した。記号の意味作用を受けて新しい記号を生み出す過程やその関わり合いは動植物も同様で、そこに思考があるという^{*14}。なるほど、2本の葦のイメージには、おそらくそのような人間と非人間の両義的で共通の思考が裏打ちされているのだ。

さらに、その関わり合いは、言語を超えた「表象」で行われることの重要性が強調されていたが^{*15}、人間ならざるものに向けても、鑑賞者に向けても、行為等を通してイメージを取り交わす努力は、山下+小林の作品においても実践されてきたことである。人類学者の奥野克巳は、人新世において今日の学問では、自然科学や人文科学という二分法をも意味をなさなくなっ

ていると述べ、西洋思考に潜在する人間中心主義は脱中心化しつつあり、その考え方の中核に位置するのは、人間と非人間の両方の活動を認めるアイデアであると説明している^{*16}。この学問の動向についての俯瞰的な説明は、作家の立脚点をも照射してくれる。そして、人類学が人間を超え出たところから人間を語る学問へと転換させてきたというように、例えば《infinity ~ mirage》のような、自然界のある対象とできる限り関係を結ぼうとする作家の努力を支えているものに、記憶や経験、作品を通した実践から形作られる「人間」について、その輪郭線に立ちたいという考えがあることにとても合点がいった^{*17}。人と自然の揺らぐ境界を考えると、人の輪郭線についての本質を問うことは、同じ意味を持つのかも知れない。

未来への想像力

《infinity》や《1000WAVES》等の初期作品は、カール・マルクスの『資本論』からの影響をうかがわせ^{*18}、現在においてもなお有意義な思考をもたらしてくれる。

《Release of mineral water》は、販売されていたドイツのミネラルウォーターを川に戻しにいくという作品である。水が販売されていることに違和感を持ったことを契機として制作された作品である。そのシンプルな違和感は今後ますます共有されるべきものではないだろうか。

斎藤幸平は、『人新世の「資本論」』の中で、共有財である「コモン」、その誰もが使える無償で潤沢であった富を、資本主義のシステムがいかに希少な「価値」に転化してきたかを、マルクスの考えを参照しながら説明している。その中では、かつては無償の共有財であった水が管理され、水そのものが資本となる、そのことの弊害や危険性について指摘していた^{*19}。このように共有財を解体して私有化された富は、希少性の増大によって商品としての「価値」を増やす、人々は生活に必要な富を利用する機会を失い困窮する、そのことが結果的に人を貧しくしているのだと主張する^{*20}。

経済産業省の報告によれば2030年には世界の水ビジネスは110兆円規模になると予測されていた^{*21}。ミネラルウォーターを前にして、水は購入するものなのだろうかというささやかな疑問は、その勢いにかき消されそうである。

しかしながら本作は、社会のシステムから個々の考え方にま

で変革が迫られる現在、有意義な視点を再び取り戻してくれるものではないだろうか。《Release of mineral water》は、作家が人と自然について考えるきっかけとなった作品であったそうだが、資本主義社会のシステムに疑いを持つことに加えて、エコロジーや脱成長の意識をも示唆しつつ、別の方法へと想像力を促す点において、現在に続く作品の傾向がよく表れているように思われる。

作家が教えてくれた書籍である、リチャード・ドーキンスの『利己的な遺伝子』では、次のように述べられている。「個々の人間は基本的には利己的な存在なのだと仮定したとしても、私たちの意識的に先見する能力ー想像力を駆使して将来の事態を先取りする能力ーには、自己複製子たちの引き起こす最悪で見境のない利己的暴挙から、私たちを救い出す力があるはずだ^{*22}。」様々な生物はたとえそれが利他的に見える行為であっても実は利己的なのだという。人間においても例外なく利己的だそうだ。しかし、一つの可能性が示されている。その利己的な遺伝子への抵抗の方法こそが想像力である。

さて再び、《infinity ~ mirage》に戻ろう。本作は、美術館での展示だけでなく、チラシによってコンセプトが提示され、特

設サイトでは、ライブ映像が配信され、「皆さんの∞」で、別の場所から撮影され投稿された写真を共有できるようにした。そもそも「∞」が現れたとして、それを対岸から望遠鏡で確認できるのは、ほんのわずかな人であることは想像に難くない。コロナ禍において移動ができない方々も、黒部近隣の方々も、同じようにライブ映像を通して楽しむことのできる作品のかたちは、「いま、ここ」というサイトスペシフィックな空間である展覧会場や屋外看板と対をなし、コロナ禍で各々の「いま、ここ」に寄り添い共有できる点でもとても考えられた作品であった。

そして、このプランが計画された当初からずっと誰もが半信半疑であった「∞」が出現した事実は、やはり、どう考えても、この不確かな世界の中で私たちに無限の可能性を信じさせてくれるものであると言わなければならない。また、それが自然との協働によって与えられたイメージであることを忘れてはならない。《infinity ~ mirage》における「∞」の成立は、人がその際まで行って関係を結ぶ努力をした結果として、その半分を自然現象がもたらしてくれる相対的なものであり、またそれをしっかりと見つめ返すという態度も必要なのである。

（しゃくどちかこ、黒部市美術館学芸員）

- *1 | ユクスキュル／クリサート、『生物から見た世界』、日高敏隆・羽田節子訳、株式会社岩波文庫、2005年
- *2 | 山下麻衣+小林直人ウェブサイトより(2021年10月1日閲覧) <http://www.yamashita-kobayashi.com/ja/works/major-league-birdwatching.html>
- *3 | 中尾英恵、「山下麻衣+小林直人 地球上を生きる1組の生き物として美術と向き合ってみる」、『山下麻衣+小林直人：ノートとノートの中』展覧会カタログ、小山市立車屋美術館、2015年、p.61
- *4 | 芥川龍之介、「墨気楼ー或は、統海のほとりー」、『湖南の扇』、文藝春秋出版部、1939年、p.228
- *5 | 山下麻衣+小林直人、吉本郁子及び筆者によるインタビュー、2021年9月24日 <http://mirage.yamashita-kobayashi.com/interview/>
- *6 | 注*4に同じ、p.233
- *7 | 注*1に同じ、p.158
- *8 | パスカル、『パンセ』、前田陽一・由木康訳、中央公論新社、1973年、p.48
- *9 | 梅原猛、『人類哲学序説』、株式会社岩波書店、2013年、日本文化の原点を「草木国土悉皆成仏」という仏教思想(天台本覚思想)に見出し、それは同時に世界の原始的文化に共通の思想であると考察し、近代西洋的思想を乗り越えるものとして提唱している。
- *10 | 山下麻衣+小林直人、筆者とのメールのやりとりから、2021年8月9日
- *11 | 「人と自然」、「人も自然」、「人や自然」、「人は自然」、「人に自然」、「人が

- 自然」、「人の自然」、「人が自然」の順番で20秒毎に入れ替わる。
- *12 | 注*8に同じ、p.250
- *13 | 注*8に同じ、pp.250-251、259-260
- *14 | エドゥアルド・コーン、『森は考える』、奥野克巳・近藤宏 監訳、近藤祉秋・二文字屋脩 共訳、株式会社亜紀書房、2016年、pp.51-178(第1章「開かれた全体」、第2章「生ある思考」)を参照。
- *15 | 同上。
- *16 | 奥野克巳、「明るい人新世、暗い人新世 マルチスピーシーズ民族誌から眺める(1)」、『現代思想』12月号、vol.45-22、2017年、p.78
- *17 | 注*5に同じ。
- *18 | 注*5に同じ。
- *19 | 斎藤幸平、『人新世の「資本論」』、株式会社集英社、2020年、pp.248-249を参照。
- *20 | 同上、pp.234-276(第6章「貧乏な資本主義、潤沢なコミュニズム」)を参照。
- *21 | 「水ビジネス海外展開施策の10年の振り返りと今後の展開の方向性に関する調査」、経済産業省ウェブサイト、2021年3月(2021年10月1日閲覧) https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/waterbiz/kenkyukai/kaigai_infra/003_business.html
- *22 | リチャード・ドーキンス、『利己的な遺伝子 40周年記念版』、日高敏隆・岸由二・羽田節子・垂水雄二 訳、株式会社紀伊國屋書店、2018年、pp.344-345